

三浦綾子『道ありき』論 — (その一)

片 山 礼 子

目 次

- (一) はじめに
- (二) 三浦綾子文学の魅力
- (三) 三浦綾子と短歌
- (四) 『道ありき』と有島安子著『松むし』の共通点
- (五) おわりに

(一) はじめに

三浦綾子氏は、数多くの書物を世に送りだしている。その数は膨大な数字に及んでいる。中でも小説はいうまでもなく、そのジャンルの広さに目を見張るものがある。とりわけ本論では、『道ありき』を通じて、作家「三浦綾子」の生き方に焦点をあてたい。特に、次に示す『道ありき』の冒頭を引用する。

わたしはの中で、自分の心の歴史を書いてみたいと思う。

ある人は言った。

「女には精神的な生活がない」

と。果たしてそうであろうか。この言葉を聞いたのは、わたしが女学校の低学年の頃であった。その時わたしは、妙にこの言葉が胸にこたえた。なぜなら、たしかに女の話題は服装や髪型、そして人のうわさ話が多いように少女のわたしにも思われたからだ。

(女にだって魂はある。いや、あるべきはずである)

その時わたしは、そう自分自身に言いきかせた。— 『道ありき』より—

上記に示した文章は『道ありき』冒頭の箇所である。この作品が発表されたのは、昭和四十四年である。この当時は、まだ女性の立場が現代ほど自由ではなく、まだ社会の規制、規範が根強く残っている時代である。こうした時期に、三浦綾子氏はきっぱりと自分の意思を伝えている。また、この他にも、『道ありき』の中では無関心ではいられない数々の言葉に出会うのである。また、三浦綾子と短歌に関わって作品の考察を深めたい。

(二) 三浦綾子文学の魅力

『道ありき』は、『この土の器をも』、とともに、自伝小説『草のうた』、『石ころのうた』に続くもので、三浦綾子の青春期に位置する。作品に盛り込まれている含蓄のある言葉の数々に出会うのである。しかし、敗戦後に三浦綾子が現実に見てきた、社会の矛盾や不合理性に直面することになる。それは、教師としての立場からその屈辱と挫折に向き合わなければならなかった。同時に彼女自身が、脊椎カリエスの発病による十三年間にも及ぶ闘病生活、虚無と絶望の果て、三浦綾子が求めた生きかたとは、どのようなものだったのか、作品を通じて生きることへのメッセージにふれることができる。そのことは、三浦綾子『道ありき』から無関心ではいられない言葉に出会う。少し、そうした言葉の一節を拾ってみよう。

・人間とは、悩み多いものであるべきだと思っていた。 (四章)

「人」を冷静な視点で見つめている。苦しみのない人生なんてあり得ないだろう。「悩み」があるからこそ「希望」という文字も生まれるのかもしれない。

・人間が中心の思想に、わたしは何の感動もなかった。 (五章)

など、この頃「虚無というものは、恐ろしいものである」と自ら述懐している。すべてのものが信じられなくなり、次第に心が荒れて行った当時の状況を筆者は語っている。また、「忘れられない敗戦の、苦い体験が、わたしに人間というものの愚かさ、頼りなさをいやというほど教えてくれた」と懐疑的な側面にも注目をしなければならない。

・真剣とは、人のために生きる時にのみ使われる言葉でなければならない。 (十二章)

こうした言葉とともにこの章では「人間」について人間の弱さ、貧しさが語られ、人としての本性にふれることができる。

「人間の弱さ」そして「貧しさ」。また、「何ひとつ確かなものなんてありゃしない。だがほしいのだ」と。「永遠であるものが」とある。つまり、「完全燃焼の中にこそ、永遠なるものがあるのではないか」と述べている。この当時、三浦綾子氏は手応えのある確かさを探し求めていたと考えられる。

他にも、

・まず誰よりも自分に絶望していたから、 (十三章)

こうした言葉は、ごくあたりまえの表現のようだが、スムーズに口には出せない言葉である。自分自身と向き合い、内省する中で表出された言葉であろう。また、この章で三浦綾子氏は「聖書」のことや「神」についてもふれている。

- ・自分の意思よりも更に強固な、大きな意志のあることを感ぜずにはいられなかった。(十八章)

日常生活の中にも、自分自身の意志以外の、何かが加わっていることを示唆している。「決して自分の意志通りに事が運んでいない」ことをきっぱりと言っている。

- ・相手を精神的に自立せしめるということがほんとうの愛なのかもしれない。(二十八章)

ここでは、幼なじみ前川正氏の言葉が深く影響を与えている。「人間は、人間を頼りにして生きていく限り、ほんとうの生き方はできませんからね」と、人を頼ることは、まだ本来の意味での愛のきびしさを知らないということなのだろう。

- ・自分はいったい何に安心して生きているのか。(三十章)

「自分自身の魂が不安であるならば、安住の地を求めても、もっと厳しい求道の生活をしなければならぬはずであった」と記している。そして、これまで漫然と読んでいた聖書を、真剣に学ぶようになった経緯が述べられている。

- ・いまわたしは小説を書くようになったが、アララギに学んだことが実に大きな益となっている。(四十章)

ここに示したものは、まだほんの一部である。しかし、彼女の生き方が存分伝わってくることも根拠ある事実として受け止めなければならない。特に、四十章にある三浦綾子にとっての短歌、そして、三浦光世氏との出会いは、作家・三浦綾子の作品に大きく影響をあたえているといえよう。また、それらのことに関して、彼女は「病む吾の手を握りつつ睡る夫眠れる顔も優しと思ふ」と毎日は幸せ過ぎて、わたしは歌を忘れて行った。つまり、「幸福な日々はわたしから歌をとり去ってしまった」と述べている。確かに三浦綾子は昭和三十六年を境に短歌を詠むことから遠のいている。

ここで、三浦綾子・つまり一人の作家が誕生するまでの道のり、それは、決して平坦な道のりではない。自らが、述べているように、虚無、絶望の最中に、生きる希望を与えているものは何だったの

か。そのことは、『氷点』をはじめ、一連の三浦文学に通じるテーマとも大いに関わってくるのではなからうか。

『氷点』が発表された時、『原罪』という言葉が注目された。この事に関して高野斗志美氏は次のように述べている。

ある集まりで初めてお会いした。ぶしつけに、「原罪というのは、どういうことですか」とたずねた。すると、すこし考えたあと、眼をあげ、おだやかだが、きっぱり答えてくれた。

「的(まと)をはずれて生きることです」

その言葉が、その時の、きりりとした眼の輝きといっしょに、今も鮮明に記憶にある。

『氷点』のテーマに関わって、氏の『原罪』についての大変興味深い捉え方がある。(注一)

このことは、三浦文学の根本に流れるテーマとも通ずる。ここで、高野斗志美氏が直接、三浦綾子氏に尋ねて、返ってきた答えのように「原罪」とは、「的(まと)」をはずれて生きることと尽きると考えられる。そのことは、『道ありき』を読む中で、その意味する共通点が見い出せるのである。ここでは、三浦綾子氏は、自身の言葉で「自分」を語っている。それは、まさしく「虚無」、絶望から這い上がる再生の道であった。そうした三浦綾子氏の生きることへの軌跡そのものが「原罪」を考える上で抜き差しならぬ事実ではなからうか。

『道ありき』は三浦綾子の青春期の内奥に刻みこまれた貴重な心の歴史として読みとることができよう。

また、三浦文学が多くの人に支持され、読み継がれてきた理由の一つに、作品の根底に流れるテーマが、人として「生きること」、「生」と「死」にかかわって、「生きること」への問いかけが作品の中に内蔵していると考えられる。そして、そのことは「原罪」を解き明かす内容とも相通ずると考えられる。

三浦綾子氏にとって、十三年間にも及ぶ闘病生活は、生活面で大きく変化をもたらした。

また、そのことは、「愛 つむいで」の四十九編の言葉からも、そうしたことの裏付けを読みとることができる。また、三浦光世氏と綾子氏の言葉を媒体とした相互の対話にも興味がそそがれる。

少し、そうした言葉を拾ってみよう。

- ・ 私たちは、毎日生きています。誰かの人生を生きているのではないのです。自分の人生を生きているのです。きょう一日は、あってもなくてもいいという一日ではないのです。もしも、私たちの命が明日終わるものだったら、きょうという一日がどんなに貴重かわからない。

『愛すること生きること』

真に生きることの大切さを知るものこそ言える言葉ではないだろうか。また、印象深いのは「誰かの人生を生きているのではないのです。自分の人生を生きているのです。」ときっぱり言えることの素晴らしさである。

- ・「死ぬよりほかに道がない」

などと考えるのは、いかに人間が傲慢であるかということの証左である。道は幾つもある。

生きようとする時、必ず道はひらけるのだ。

『孤独のとなり』

『道ありき』の中で、三浦綾子は絶望の果て、「死」を選ぼうとしたことも事実である。上記にあげた一節は、そうした中で、「生きる」ことの再生への道を深く考えさせられる一節である。

- ・一見、マイナスに見える体験というものが、どんなに人を育てるための大事な体験であることか。そのマイナスの体験が、やがて、多くのプラスに変わるのではないだろうか。

『愛すること信ずること』

この言葉にも同様なことが言える。三浦光世氏は「病気を始め綾子にはマイナスの体験が多かった。十人きょうだいの五番目に生まれ、小学四年生の時から、女学校を卒えるまで、毎朝五時に起きて牛乳配達をした。これは即マイナスとはいえないが、その労苦も後には大きなプラスとして、綾子の人生に作用した」と述べている。このことは、「一見、マイナスに見える体験というものが、どんなに人を育てるための大事な体験であることか」との一節と、決して矛盾をしていない。

- ・わたしたちひとりひとりの命はかけがえのないものだ。そのかけがえのない命を、生かされるままに、せいっぱい生きて行くすなおさをわたしは持ちたいと思っている。『あさつての風』

ここでは「命」の大切さを強く意識させられる。

- ・同じ一生でも、人によってちがうものだと思う。雨一つでも憂鬱になる人間と、喜ぶ人間がいる。同じ道を歩いているからと言って、同じことを感じているとは限らぬものだ。

『生かされてある日々』

この一節は、人間の本性を見事に映し出している。人は時には身勝手なものかもしれない。しかし、こうした許容がやがて、三浦文学への魅力に通ずるのではなかろうか。

- ・言葉は確かに大切なものだ。しかし人間には、言葉よりも大切なものがあるのだ。

このことも、人としての根元的な重大さを説いていると考えられる。

- ・やさしさとは、相手の身になって考えると共に、そのやさしさを意志によって持続することにあると思う。意志と知性に支えられないやさしさは、それはいわば、気まぐれであって、真のやさしさではない。
『孤独のとなり』

ここでは「意志」、「知性」の言葉が光っている。そして、同時に真に求められる「やさしさ」についてふれることができる。このことについて、光世氏は「私は結婚生活において、意志的でも、知性的でもなかった。意志も知性も綾子のお株と言えた。そして綾子は真に優しくかった。私にのみならず、多くの人に優しくかった。だがこのような言葉を残したところを見ると、やはり絶えず意志的であろうと、努力していたものと思われる。」と述べている。

- ・無関心ということは、何と恐ろしいことだろう。つい、目と鼻の先の出来事であって、関心を持たぬ限り、それは遠い世界の出来事である。

この無関心はわたしの持つ大きな罪悪の一つのように思われる。『石ころのうた』

「命」との関わりについても考えられる。生き方の一端、そして、その喜びを示しているといえよう。

- ・「使命」という字は、命を使うと書くと聞いた。なるほど、使命とは命を使うことか。味わい深い言葉なり。一本の花が命を限りに咲いている。それもまた使命を果たしているということ。その人なりにひたすらに生きる、美しいことだ。
『この病をも賜として』

この言葉にも、上記で示されているように、「人」としての根元的なテーマが内蔵していると考えられる。

- ・鉄砲や刀では人の心まで変えることはできないが、たった一行の詩が、人の心の奥底にいつまでも生きることができる。
『わが青春に出会った本』

- ・最も短い詩型は俳句であろう。二十歳代に、私はこの俳句を三句作った。その一つは次の一句。

灯の　　まだはるかなり　　雪の道

いかに道は遠くても、目指す光がある限り、私たちは歩みつづけることができる。　　（光世）

綾子、光世氏の印象的な一節である。

こうして、『愛　つむいで』からも数知れず名句に出会う。

（三）三浦綾子と短歌

さて、ここで三浦綾子氏にとって短歌はどのような意味があったのだろうか。

三浦綾子さんと短歌との関わりについては、先に示した事柄でも知ることができる。

何首か三浦綾子氏の短歌にふれてみよう。

- ・見舞いに貰ひし飴は溜め置き弟等に用事頼む時少しづつ遣る
- ・毀れ筆筒古鏡台がある故に漸く女が住むと判るかも知れぬ吾が部屋
- ・ひる寝るを罪の如くに思ひつつ臥す哀れさを嫁ぎて知りぬ

ここに掲げた短歌に共通する事柄として、生活の実体験としての要素を多く詠まれている点である。特に、『道ありき』、『この土の器をも』にも続く作品にたびたび短歌が登場するのである。しかし、昭和三十六年を境に三浦綾子さんの短歌に出会わなくなる。そのことについて、綾子氏自身、「毎日は幸せ過ぎて、わたしは歌を忘れて行った」と述べている。

わたくし達は、こうした短歌（注二）にふれることにより、これまでとは異なった三浦綾子さんに接することができる。しかし、こうした一語一語にこめられた言葉の輝きが後々の三浦文学を大きく花開かせることになる。そのことは、日々の言葉のつぶやきが、やがては短歌として、心の内面が詠み上げられるのと似ている。

昭和三十九年に『氷点』が発表され、作家として歩みはじめる。周知のごとく、『氷点』を発表する以前に、林田律子というペンネームで小説を発表している。もちろん、幼い頃からの文学的素養は並々ならぬものがあっただろう。そうして十三年間におよぶ闘病生活から得た人間に対しての鋭い洞察力や広い包容力は、三浦文学の原点だと考える。

また、三浦文学を考えることを通じて、『道ありき』と有島安子『松むし』の共通点を見い出すことができる。

(四) 『道ありき』と有島安子著『松むし』の共通点

『松むし』は、有島武郎の妻、安子が大正四年一月に平塚杏雲堂病院に入院し、その後翌年の八月二日まで一年六ヵ月間に及ぶ闘病生活の中で安子を書き記した手記などである。安子の死後、大正五年九月に武郎自身がまとめ、遺稿集四百部が出版される。

『松むし』所収七十一首のからも、三浦綾子・有島安子が闘病していた時期に違いはあれ、いくつか詠まれた歌からの共通点を見出すことができる。それは、病魔との闘いの中で、それぞれ筆者の言葉のつぶやき、内面の表出が短歌にまで結晶している点である。そして、それらの詠まれているモチーフが生活している身の回りの事柄からしだいに内容が変化していることもあげられる。例をあげるならば、『松むし』では、短歌を詠みはじめた頃の歌の内容がほんの身近なものから、自分の心に内省し、冷静に自分自身を見つめ、我が命のあり方を凝視する歌が多くなっていく。こうしたことは、三浦綾子の『道ありき』の短歌にも通じるのではないだろうか。特に、三浦文学では、短歌という形が小説やエッセイの中で昇化され、奥行きのあるものへと結晶していると考えられる。

このことは、三浦綾子さんの文学から、希望や勇気が与えられる。この言葉にも象徴されているのではなかろうか。それは、理屈ではない。どんなに苦難や困難が目の前にあろうとも、やがてはそれらを解決すべき方向性を見つけることができる。人としての忘れてはならぬ大切なことを省み、そして強く生きようとする望みが、いつれの作品からも窺われていることも記しておきたい。

(五) おわりに

こうして、『氷点』をはじめとする三浦文学を通じて多くのことを学ぶのである。『道ありき』から、それは女性として、人としての生き方に及ぶものであった。未来に向かって、人間としての根元的な問題を孕んでいる。また、人を愛することの重大さ、そして、時には誰かを傷つけ、やがては自分自身も傷ついていくことを考えさせられる。人間がもつ哀しさにまで及び、かけがえのない「生」そのものについて深い感銘を受けるのである。

『道ありき』が、三浦綾子氏の自伝小説であることは、周知の通りである。他にも出生から少女期時代の『草のうた』、女学校を卒業し、教師になり、戦時中での混乱の最中、青春期での回想として『石ころのうた』、『道ありき』はこれらの作品の続くものである。

ここで、三浦綾子氏にとって「書くこと」の意味がどのようなことだったのだろうか。もともと「書く」ことにより、自分自身のことを知ったり、あるいは、これまで気がつかない事柄の再発見に通ずるものだと考える。こうした一連の自伝小説にふれるなかで、「書く」という行為そのものが、「生きること」とに関わり、決して切り離すことができない。

三浦文学において、『原罪』の意味を問うこと、そして、北海道の土地で生まれ、育まれた三浦文学が、今日的にどのような意義をもつのか。こうしたことへの取り組みが、さらに求められるであろう。

【注】

【注一】 「三浦綾子と旭川」の中で、高野斗志美氏は、次のように述べている。

見本林は、『氷点』の小説舞台である。しかし、それだけに終わっていない。たんにフィクションを色彩づける風景としてあるのではなくて、見本林は、小説の構造全体にかかわるシンボリックな時空間であって、いわば運命的なトポス（場）としてこの作品に内在化されているといわなければならない。そして、ヒロインの陽子が次第に接近していく生の真実な姿、原罪のありかを照らしだす思想のトポスとしての役割をはたしていることも認知されてくるのである。

『氷点』を書きあげるために三浦綾子は、いくども見本林をたずねた、という。そのことは、この作家が、見本林という実在の地を物語のトポスに変容させていくこと、つまり、フィクションを構成していく内的枠組の磁場へと再構成していったこと、そのプロセスを示している。とある。

【注二】 短歌に関して、三浦綾子は一九四九年——一九六一のほぼ十年間に相当数の短歌を「旭川アララギ会々報」に発表している。

- ・ 雨しぶく丘の小径に佇みて一つの想いに堪えていたりし
 - ・ 風雨激しき丘を歩みて咳み込みし時午後四時のサイレン聴ゆ
 - ・ 歩み行く丘の彼方の空の雲黒と黄に濁りて昏れ行く
 - ・ 湯たんぽのぬるきを抱きて眼醒めいるこのひとときも生きていと云うのか
 - ・ 命いたわりひたに生きむと思ふ朝障子に写りて島影よぎる
 - ・ いつの日か逢う事あらむ片目細める表情も俄かに悲しきものとなにぬ
 - ・ おやこんなに穏やかに微笑む時もあるのかと鏡の中の吾を見つめり
- と多数。

付記 『松むし』については、四百部中第三百七十四冊（北海道大学図書館所蔵・資料提供：片山典子）を使用した。

なお短歌の表記においては、旧漢字、旧仮名遣いを、新漢字、新仮名遣いとした。